

本日は昇天後主日です。昇天日は毎年必ず木曜日になりますので、その直後の日曜日には特に主の昇天を覚えることになっています。

さて、主イエスが天にお帰りになられる直前、弟子たちと主イエスの最後の会話が記されております。

弟子たちは集まって、「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか」と主イエスに尋ねています。

主イエスが天国に帰られたのは、この世での働きをすべて終えられたからでしたが、それでは弟子たちはもう主イエスがいなくても立派に伝道していけるようになったのでしょうか。決してそうではありません。弟子たちは、イスラエルのために国を建て直してくださるのは…、と、主イエスがユダヤ民族をローマの圧政から解放してくださるのだと考えていました。驚いたことに弟子たちは最後の最後まで、主イエスの真の使命を正しく理解してはいなかったのです。三年間共に生活し、教えを聞き、奇跡を見、十字架と復活を体験しても、まだ主イエスのことが本当にはわかっていなかったのです。

主イエスはそのことを示すため、言われました。

イエスは言われた。「父が御自分の權威をもってお定めになった時や時期は、あなたがたの知るところではない。あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」

すなわち主イエスはその間そのものを退け、地の果てに至るまで主イエスを伝える、天国を宣べ伝えられた主イエスを世界に伝えていく、世界伝道こそがあなたがたの使命だと言われたのでした。

このように主イエスが天国に帰られたとき、弟子たちは主イエスの使命を立派に担えるようになっているどころか、その姿すらまだはっきりは見えていなかったわけです。そのような中で主イエスはなぜ去っていかれたのでしょうか。

使徒聖ヨハネは次のように記しております。

今わたしは、わたしをお遣わしになった方のもとに行こうとしているが、あなたがたはだれも、『どこへ行くのか』と尋ねない。むしろ、わたしがこれらのことを話したので、あなたがたの心は悲しみで満たされている。しかし、実を言うと、わたしが去って行くのは、あなたがたのためになる。わたしが去って行かなければ、弁護者はあなたがたのところに来ないからである。わたしが行けば、弁護者をあなたがたのところに送る。その方が来れば、罪について、義について、また、裁きについて、世の誤りを明らかにする。

このように、主イエスは弟子たちがこのような状態だったからこそ去らなければならなかったのです。弟子たちはこれから誕生する教会の指導者として、伝道の責任を負うものとして強められねばなりません。弟子たちを強めてくれるのが弁護者、すなわち聖霊です。聖霊降臨については来週学ぶことになっておりますのが、昇天日から十日後、弟子たちの上に聖霊が降され、その物音に集まってきた人々が主なる神の偉大な働きについて聞き、約三千人が洗礼を受けて最初の教会が誕生しました。主イエスが与えられた地の果てまで福音を宣べ伝えよとの使命が果たされ始めたのでした。そしてこれが世界にキリスト教が広められていく最初の日だったのです。弟子たちは見事にその使命を果たす者にふさわしく備えられていきました。弟子たちがそうなるために、主イエスは去らなければならなかったのです。

主イエスに召され、三年間生活を共にして従ってきた弟子たち、十字架にかかるために捕えられたとき見捨てて逃げてしまった弟子たち、復活の主イエスに出会い、落胆の底から勇気と希望が沸き上がり、起き上がらされた弟子たち、主イエスとの別れはどんな気持ちだったことでしょうか。さきほどの使徒書の中に、『イエスが離れ去って行かれるとき、彼らは天を見つめていた』とあるのは、弟子たちの当惑をよく表わしております。しかし主イエスの聖霊の約束を信じて待った弟子たちは、やがて大きな喜びで満たされ、世界へ何をも恐れずに出ていくことになったのです。

弟子たちが信じた主イエスの言葉を、私たちも耳を傾けてみましょう。

はっきり言うておく。あなたがたは泣いて悲嘆に暮れるが、世は喜ぶ。あなたがたは悲しむが、その悲しみは喜びに変わる。女は子供を産むとき、苦しむものだ。自分の時が来たからである。しかし、子供が生まれると、一人の人間

が世に生まれ出た喜びのために、もはやその苦痛を思い出さない。ところで、今はあなたがたも、悲しんでいる。しかし、わたしは再びあなたがたと会い、あなたがたは心から喜ぶことになる。その喜びをあなたがたから奪い去る者はいない。

私たちもまた、主イエスの約束を信じ、日々ますます霊の賜物が与えられますようお願い、待ち望みたいものであります。